

なのはな通信

第18号 2007.9



編集・発行
勤医会東葛看護専門学校

〒270-0174 千葉県流山市下花輪409

TEL 04-7158-9955 FAX 04-7159-7055

発行責任者 石倉 啓子



みんなで「協働して」

学びあう学校に



校長 山田 功

フィンランドは学力世界一と言われています。そのフィンランドで教育改革を共に進めていた中島博早大名誉教授は「本当に学ぶというのは『競争して学ぶ』やりかたでは深まらない。私は『協働して学ぶ』『いっしょになって学ぶ』のが本当の学びだと思えます。日本の教育改革は、ここが違っています」と語っていました。

私は中島先生のお話を、本校のグループワークや実習の学びと重ねて、とても共感するものがありました。実習では、患者さんの「治りたい」という願いと、その願いがどうしたら実現するかを「学びたい」という学生の気持ちは重なりあい、まさに「協働」の学びになっていきます。

その患者さんとの関係を、学生は常に真剣に考えています。先日一年生の基礎実習の時のことですが、あるレポートに「患者さんに○をして上げた」と書かれていました。これを読んだ学生から「患者さんにしてあげる、という言い方はどうなのか」という疑問が出されました。レポート作成者は直ぐに「そう。そうですよね『させて頂く』ですよね」と答えました。すると又別の学生から「『させて頂く』というのでいいのか。なにかへり下っているように感じるが。学生の時はこれでいいけど、医療者になった時、もつと双方の関係がピタリする言い方はないのか」という意見が出され、患者さんとの関係を熱く語る時間が続きました。私はここに参加しながら、かつて見た山田洋治監督の映画『学校』のシーンを思い出していました。ある「非行」少女が、ふと学校に行きたくなつて夜間中学の校門でしゃがんでいたら、黒田先生（西田敏行）が来て「どうしたの?」と聞き、「学校というのはね、教えたいという先生がいて、また学びたいという生徒がいて、それで成り立っているんだよ」と言い、学校に大切なのは対等な関係だと教えていました。

四月に発刊された『患者さんの笑顔が見たい』（三上満、小林功共著）の中には、「ここに教育基本法が生きている学校がある」と書かれています。その学校にまた実りの秋がやってきました。今秋も『協働』して学びを深めあつて、意義ある青春の日々に出会えるといいですね。

2007年度 学校の目標

はじめに

この数年、看護基礎教育のあり方をめぐって全国的な議論が行われてきました。また一方で、看護師不足からすさまじい看護師争奪戦が展開され、これに敗れた病院・病棟の閉鎖も報告されています。本校は、引き続き全国の看護学校と手を携え看護基礎教育の充実発展に全力をあげます。そして、その際もっとも大切なことは、患者さんと正面から向き合い患者さんに寄り添うことのできる看護師の育成であり、国民と地域社会に貢献できる看護師の育成です。「地域医療の破壊を許さず」の思いを胸に、本年度の教育活動方針を紹介します。

2007年度の目標

イ) 教育活動の基本方針

たしかな知識や技術の修得とともに人間としての成長を応援します。

ロ) 学生と授業の評価について

学生の到達点と課題を事実に基づいて共有するとともに、授業そのものの準備、工夫、教材研究さらに授業内容を分析し、授業の改善に取り組みます。このため、教員同士の交流はもちろん、講師の先生、臨床指導者のみなさんとの連携を強化します。あわせて、よりよい授業を作りあげるため本校独自のカリキュラム改訂を検討します。

ハ) 国試について

昨年の看護師国家試験では大変よい成績を修めました。引き続き「看護基礎教育の範囲内で国試に合格する」という本校の基本方針を堅持します。この間の国試では受験者の「分析力」を問う問題が散見されますが、本校としては「事実の把握」や「看護対象に向き合う力」という視点とセットでこの問題に対応したいと考えます。

ニ) 教員の目標

教員の専任教員としての成長と教育者としての成長をめざします。臨床との交流・連携を強めます。現在医師の皆さんにお願いしている看護学講義について、可能な講義から教員の講義に移行します。

ホ) 受験生の確保

全国的に看護学校の受験生が減りつづけています。本校は大変特色があり、また本格的な教育実践を行ってきた学校です。本校の日々の姿を積極的にアピールしていきます。このため、学生募集要項の改訂、ホームページの刷新、ポスターの作成、学校訪問の拡大、オープンキャンパスの開催などに取り組みます。

おわりにー「学生が主人公」の学校らしく

昨年、戦後60年余日本の民主主義教育の指針だった教育基本法が改定されました。国民が主人公の教育を「国家が主人公の教育」に変えてしまおうという強引な国会運営でした。このような状況の中でも、本校は「学生が主人公」の教育を学生とともに守り抜く決意です。

原水禁世界大会に 参加して

二〇〇七年原水禁に参加して

八月七日から長崎の原水爆禁止世界大会に参加しました。最も印象深く手応えを感じたのは、分科会『青年の広場』への参加でした。全国から集まった参加者が、アツという間にグループ編成され、市民体育館の会場に四〇以上のグループになります。

グループメンバーが揃うと、長崎で平和活動が続いている七九歳の世話人の方が路面電車で小さな公民館へ案内してくれました。

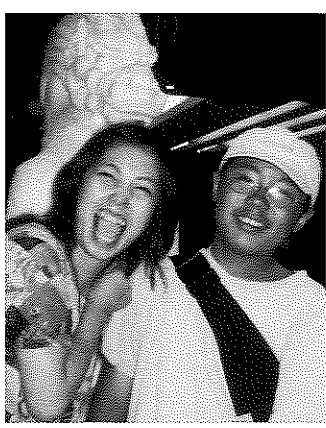
公民館では、九歳で被爆した三人の方から体験と人生観を聞かせてもらいました。最初に話してくれた太田洋一さんは、「終戦前、学校の先生が子供たちにアメリカやイギリス人は頭に角が生えていて、日本人を食べてしまうと教えていたことや、戦前と戦後では物の見方・考え方が一八〇度変わり、それまで年上の人の考えに黙って従うことが最も望まれていたのに対し、戦後は自分の考えや意見をもちなさいと言われるようになった。」と、軍国主義から主権在民の日本国憲法に変わったことが何え

ました。
 三人の方は、「これからの未来を担う人達に二度と同じ思いをさせ

たくない・原爆を世界から無くしたい一心で話をするようになった」とお話を結ばれました。

グループメンバーと交流する中で、全国で多くの若者が平和へ関心を持ち様々な取り組みをしていると知り、世界の平和を目指す仲間がたくさんいることに平和を追求する気持ちを強くした大会となりました。

(教員 生田 知歩)



原水禁に参加して

原水爆禁止世界大会参加の千葉県代表は五時三十分羽田空港に集合した。そして飛行機に乗り、私たち六人は長崎空港へと降り立った。

開会式の話聞き、なぜ長崎に原爆が落とされたのか初めて知った。候補として京都が上がっていたのだが、京都に落ちた場合には被害が五十万人にも及ぶこと、京都には日本の伝統的な建造物がある為に反感を受けることが理由にあげられ、長崎に標的が決定したと学んだ。また、長崎に落とされた原子爆弾は広島のものよりずっと強力であることや長崎の山々に囲まれた地形の為に物理的被害がはるかに酷かったの

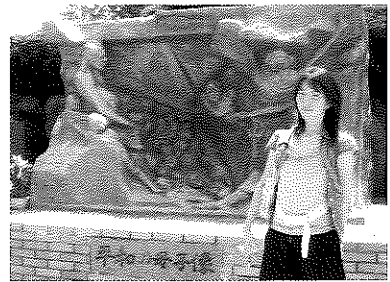
だと話を聞き、改めて原爆の恐ろしさを知ることが出来た。

被爆者の平均年齢は七四・六歳となり、家族の辛い思いや自分の体験を伝えられる人が少なくなってきた現在、もう二度とこのようなことは繰り返してはならないと言ふ祈りを込めて、私たちは被爆者の苦しみを伝えていく使命があるのではないかと考えさせられ、とても大きな学びとなった。

(2科一年 斉藤 美恵子)

原水禁に参加して

今回原水禁に参加して改めて私は何も知らなかったのだと思い知らされた。初めは、自分たちだけがこういう活動に参加しているんじゃないかと少し思っていた。



でも世界大会に参加してみても、人の多さに一番ビックリした。また外国人の多さにもビックリした。日本だけが必死に訴えているものだと感じていたが、外国の人も必死に訴えていることを知り、すごく感動した。六二年前はまだ昔のこととして片付けてはならない。今の私達が最後だとよく聞くが何でそうなのかとずっと疑問を思っていた。それは被爆者の方達もどんどんと亡くなってしまっているからだ。もし一人もいなくなってしまうたら、また同じ繰り返しをしてしまうのではないか。私もそう思う。まだ原爆の恐ろしさを知らない人が

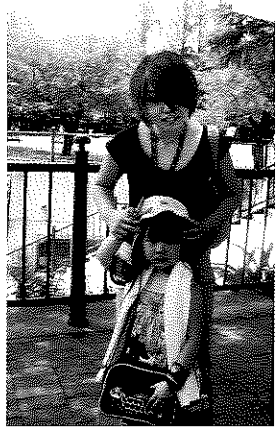
多い。また世界では核兵器がまだ残っている。核兵器廃絶を行わなければ幸せは訪れてはこないのではないかと思う。だからみんな必死に訴えてくれる。この言葉を伝えなければいけない。私はまだ知識が全然ない。知らないことを情けなく感じた。これからはもつといろいろな本を読み、知って行きたいと強く感じた。

(1科二年 広戸 真奈)

長崎・原水爆禁止世界大会へ参加して

今回大会に参加することができ親として、一人の人間として、とても貴重な経験となりました。じりじりとした暑さのなか五歳の娘はだだをこねることなく必死に歩き、遺構をめくり、資料館では涙を流し「爆弾が落ちてママが死んだらヤダ」と言っていました。五歳の娘にはあの暑さと凄まじい原爆の出来事を見せるのはショックなことだったかもしれません。しかし真実を知ることとはこれからの娘にとっては必要なことと考えるが、娘の未来はどこにも核なんてない世界にしないでと強く思った三日間でした。今回の経験を停滞させることなく様々なことに目を向け続けていかなければとおもいます。

(2科一年 松原 友紀)



新入生紹介

1科



看護第1科十三期生は四月七日に入学し四十二人でスタートしました。学生の年齢層は十八歳から三九歳までと広いことが特徴です。四十二人がそれぞれの人生を歩く中で「看護師になりたい」と同じ夢をもつ仲間と共に東葛看護専門学校に入学しまし



た。入学してすぐに行ったあすなろの郷での合宿ではレクや食事・部屋割りの企画・運営を学生達が行うことで仲間の事を知り、夢の実現に向けて思いを新たにすることができ、たのしい時間を共有しました。合宿のグループワークにおいてある学生は「小さい頃から看護師になることがあこがれだった」と語り、ある学生は「ヘルパーの仕事をしていたが利用者さんに軟膏を塗ってあげることもできない、利用者さんが望むことに応えるために看護師になりたい」等々それぞれが看護師になりたいと思いを熱く語り合いました。入学して三ヶ月が経過し人体の構造を知るための解剖学や生理学、人間理解に向けて看護総論や看護実践

に必要な基礎看護技術等、看護師になるための学習が進んでいます。学生達は机上の学習に向かいながらも初めて聞く専門用語や科目に頭を抱えているのが現状です。六月二十七日から三日間は基礎I実習を行いました。三ヶ月間学んだ知識と技術を基に実際に学生二人がベアになり患者さんを受け持ちました。三日間の短い実習でしたが学生達はたくさんのお事を患者さんから学んだようです。あるベアは身体がだるくて食事がすすまない患者さんを受け持ちました。そのなかで「美味しいと思わずに義務感で食べる食事ってつらいよなあ、普段何も考えず空腹になったら食事をしている自分に気が付いた」「患者さんのことを知るためにはもっと勉強しなければ」と実習中のカン



フランスで発表しました。あるベアは「二人にしてほしい」と患者さんに言われたことで「拒絶されたようでショックだった。でもなぜそう言われたのかを考え直してみると、実習の計画が自分たちの計画になっていて患者さんが中心ではなかった」と実習後に振り返りをしています。近年若い彼らに対し大人たちは「他人を思う気持ちが足りない」とか「勉強しない」と評価しがちです。しかし基礎I実習を通してても学生達は患者さんのことを思い、患者さんから学ぶ力を十分に持っています。これから成長が楽しみな十三期生たちです。私たち教員も学生の伸びる力を信じて学生を応援し、学生と共に学び成長していきたいと思えます。

(十三期生担任 江藤・江島)



2科



今年の四月に三十九名の学生が入学してきました。看護第2科は准看護師の免許を取得した後、正看護師を目指すクラスです。年齢も准看護師としての経験も育ってきた環境も違う学生たちが一つの教室で刺激し合って毎日を過ごしています。

入学して間もなく仲間づくりということ、体育館で合宿をしました。前日は、在宅で生活されている方の所に訪問に行きました。そして、そこで生活されている方をありのままに見て、各グループで用紙にま

とめて発表しました。ある訪問先のデイシ
エンヌ型筋ジストロフィーの二十歳代の方
から、「健康な人へ思うことは、身体の内
由が利くの何故もつと活動の場を広げな
いのか・・・もつたない。」と言われ、
その言葉に考えさせられました。在宅で心
豊かに暮らしている方々に出会えて本当に
いい学びとなり、また励まされました。そ
してこの合宿では、みんなで協力してつく
りあげる楽しさを学びました。

四月下旬は「生命活動の学び」の一環とし
て、田植えを行いました。流山の自然のすば
らしさの話を伺った後、いざ田んぼへ！ア
メンポ・ザリガニなどを見るのは小学校以来
です。学生たちがあぜ道から田んぼに入る



と一斉に黄色い声が上がります。そしてな
げかまた、田んぼからあぜ道へと戻って行
くのです。その姿がとても面白かったです。
田植えをしながら「楽しい」「田植えが
こんなに大変だと初めて知った」「腰が痛
い」など、たくさん感想ができました。稲
も順調に育っています。秋の収穫が楽しみ
です。

六月中旬から成人看護学の授業として生
活・労働フィールドに取り組みました。ガラ
ス工場の見学、農業体験・自営業・工務店に

一日体験をさせていただきました。プロとし
て働いている方々から、仕事とは何かを教わ
りました。そして労働と健康は切っても切り
離せない関係だと気が付き、生活環境や背景も
照らし合わせてみていくことが大事だと学び
ました。

田植えから始まった「生命活動」は、現
在八グループ（生命誕生・消化器・循環
器・呼吸器・背筋・神経・内分泌・免疫）
に分かれて私たちの身体の素晴らしさにつ
いて学んでいます。疑問から始まり、一つ
一つ調べていくと、「へえ〜!!」と発見と
感動の連続です。

2科は二年間という短さのため、日々の
授業内容は盛り沢山です。日々の学習は大
変ですが、みんなで助け合いながら楽しい
学校生活を送っています。

（十三期生担任 山口 人美）

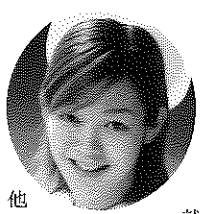


ようこそ先輩 2007

学校の進路指導の一環として、本校の卒業生による「先輩ナースに聞く看護の仕事他なんでも相談会」を六月十五日に開催しました。

参加していただいた卒業生は十五名、大学の高度救急医療分野から訪問看護ステーションまで幅広い活動内容を紹介してもらいました。またその後の個別相談会も好評でした。

三名の先輩のプレゼンテーション内容と各先輩の元クラス担任からの一言を紹介します。



就職して五年目。始めは急性期病棟に配属となり、毎日が忙しく残業ばかりで辞めたい日々でした。昨年からは他の病棟になり仕事が楽しくなり今ではこの病院に就職してよかったと思っています。

東葛にしてよかった理由として「東葛看護がすぐ近くにあること。慣れない職場で覚えることも沢山あり、人間関係づくりもあり、さらに不規則勤務で体調も崩しやすい。心身ともに疲れます。そんな時、看護師の大先輩でもあり、親のように心配してくれる先生がいる学校がそばにあることは本当に心の

支えになりました。奨学金をもらい、学生時代はよく遊び就職してからコツコツ返していく。長く働ける職場なのでこれはおすすです。卒業生が多く、看護を統一しやすい。この点は他の病院には負けません。ぜひ一緒に働きましょう。

(1科六期生 高橋 美佳)

急性期病棟で裁ってきた観察の視点と根性を生かし慢性期の病棟でゆっくりとした流れの中で患者さん達のこれからの一緒に応援してきました。患者さんのことも後輩のことも安心してまかせられる頼れるリーダーに成長しています。ママになりさらに広い視野で患者さんの応援ができるのを心待ちにしています。

(六期生のクラス担任 井上 裕紀子)



訪問看護は、病院から自宅へ切れ目なく医療を提供して安心して、療養生活を送れるようになります。利用者さんが自宅暮らしやすくなるかを考えながら、ケアの内容を決めていきます。また、利用者さんが「自宅に帰りたい」「自宅に帰したい」という思いがあれば、訪問看護は医療面での不安・介護面での不安をサポートできるため、住み慣れた場所で療養することが出来ます。

印象に残っている方の話をします。三十歳代の統合失調症の女性はご主人と息子さんの三人暮らしです。ご本人から保育園

へのお迎えがしたいと希望がありました。訪問看護師と一緒に迎えに行くことで自信をつけ、現在は一人でお迎えに行くことができようになりました。

一歳未満の脳りよう欠損の赤ちゃんです。病気のため経管栄養をしています。入院中から母親の不安が強く、退院できるか不安でした。退院後、週一回の訪問看護で育児の相談に乗ること、沐浴をすることにしました。その結果、週一回は母親がゆっくり入浴をすることができるようになり、その後自宅で安心して生活が送れるようになりました。

(2科八期生 米澤 淑子)

学生時代の米澤さんは、子育てをしながら常に学びを真摯に受け止めていました。訪問分野に異動が決まったとき、不安そうな表情を浮かべていました。学校に遊びに来るたびに表情が良くなっていきました。地域で実践し患者さんから学び、そして本人の力となることがわかりました。

(八期生当時の教員 松原 郁子)



2科十期卒業の小川です。現在はみさと協立病院で働いています。開放型精神病棟である二階北病棟に勤務し、精神・神経疾患のある患者さんへの心の病の治療と社会復帰を支援するリハビリテーションに取り組んでいます。印象

に残っているのは十九歳の予備校生のA君です。半年位前より幻覚・妄想状態が続いていて自宅で暴れ、両親が対応できず救急車にて当院を受診しました。第一印象は背が高く、目つきが鋭く、威圧的な感じがしました。入院当初は落ち着かず、用事もないのにNS室のドアを叩き続ける、深夜は個室の隅でなかなか眠れず泣いて注射で眠らせることも連日のことでした。回復期に差しかけた頃、カンファレンスで散歩に連れ出そうということになりました。初めは誘っても無視され相手にされなかったが、何度も声をかけようやく散歩に出掛けました。「何かやりたいことは？」

「ザリガニ釣りがしたい。」そして一緒にザリガニを釣りにいきました。そこからテニス・サッカー・キャッチボールをやりたいと要求がでてきて、冗談を言い合える位にコミュニケーションが深まり退院に結びつけることができました。A君は今でも時々病棟に顔出し冗談を言って帰っていきます。このような関わりが精神科の大変さでもあり魅力でもあると思います。どんなに良い薬よりも、患者さんを正面から受け止め関わることにより看護師でもある自分の方が、効果のある薬なんだと実感しました。

(2科十期生 小川 晃一)

学生時代はクラスのムードメーカーである一方、繊細なところが実はちよつと心配でした。でも卒業・就職後、患者さんに学び、仲間に支えられながら逞しく成長している姿・言葉を見聞きし、今は頼もしさを感じています。

(十期生のクラス担任 机 みどり)

私たち教員も 学び続けます。

本年三月、東大の勝野准教授を招いて、自己点検自己評価についての学びをスタートさせました。所謂押し付けと管理統制の為ではなく、我々の教育力量を高め、民主的に開かれた学校づくりにつなげる自己点検自己評価をどう創り上げていくのかの第一歩になる学習会でした。

六月には本校の化学の講師である竹内先生から私たちの日頃の教授活動における悩みに応えていただきました。例えば「酸塩基平衡について、血圧の原理について・学生にどう説明したら分かってもらえるのか」など、楽しく実験を交えながら学びのヒントをいただきました。

七月には本校の実習病院の臨床指導者研修会で、実習指導事例検討を中心に学び交流しました。

今回は八月八日・九日に行われた山梨の共立高等看護学院と本校の教員研修交流会の二日間の学びを報告します。一日目は、「生徒・保護者・地域に開かれた学校づくりと評価」というテーマで埼玉高教組の竹下先生の講演、二日目は「ヒロシマ・ナガサキに呼応した平和研修」でした。

1日目

山田功校長「自己点検評価のねらいと私たちが目指すもの」

評価というものが一九八〇年代のアンダロサクソン系の国で新公共管理からはじまり、現在に至るまでの変化がわかりやすかった。そしてその経過にも新自由主義が入り込んでいて、評価、選択、競争が加速していること



がわかった。私たちは何のための評価なのか、それは誰の都合でやられているものなのかをしつかり見極めないといけないとわかった。

評価がいろいろな角度から行われていることもわかり、情報をしっかりと捉えていく必要があると感じた。

・竹下里志氏「生徒・保護者・地域に開かれた評価と学校づくり」

この講義の前に教員同士で自分たちの教育、学習、評価過程について話し合った。そこで感じたことは、普段の授業についてどう考えているのか、カリキュラムについてはどうかなど、日頃の会議では話されない内容で、こういう話し合いの時間があればみんなでやりたいなあと改めて感じた。

竹下先生の講義は学校評価と教員評価のながれと、埼玉ではどのようにおこなわれているのか、埼玉ではどのようにおこなわれているのか、評価の力量を高めるために自分たちの教育活動を振り返り、分析し、課題を明らかにする自己評価が大切なこと、主人公は学生であり、学生の実態から出発し、保護者も交えながら対話と協議が必要なのがわかった。また新しいことをはじめるのではなく、教育活動の総括の流れに沿って普段どおり行なうことが大切というお話では、肩に力を入れなくてもいいんだと、少しホッとした。学校評価懇話会では学生、保護者、教職員の三者が微妙なバランスをとり、この話し合いに参加していくことにより学生の

成長がわかるというお話では、それだけの努力を自分しかかけられるかなと思つた。しかし教育というものを数字で評価するのではなく、お互いを認め合いながら進めていくこと、「ズレ」を大切にすることなど、とても勉強になり、専門学校でもやってみたいと思つた。グループワークでは「自分たちの評価基準を作ることが大切」「教育を考えて、教員同士で討論していくためには基本的なところの理解の一致がまず必要」「全国の民医連の学校で協力しあえる」といなどの意見が出た。

(1科 福井 慶子)

2日目 平和学習

今回初めて靖国神社に行った。おどろいたのはとにかく右翼の数、しかも二十歳前後の若者ばかり・・・

いかに世の中が右傾化しているかを実感した。私はこの感想文を故郷の沖繩で考えている。六十二回目の終戦記念日を久しぶりに沖繩で迎えたが、沖繩の戦後は終わる気配どころか戦前に戻っているようである。あいかわらず米軍演習はうるさいし、国道五十八号線は米軍車両が堂々と走っている。安全であるはずの学校に米



軍車両が進入したため沖繩県が米軍に抗議しても米軍からの謝罪は一切なし。普天間にかわる強化基地を辺野古に作るうとして。住民の要求である環境アセスメントも不備ばかり。六十二年たつても平和と安全の保障は全くなく治外法権が生きている。平和ってなんだろう？戦争ってなんだろう？靖国ってなんだろう？魂を英霊として奉ることは私にはどうしてもごまかしにしか思えない。靖国は教育基本法と日本国憲法の制定が国を弱体化させたとして述べている。A級戦犯達は無罪だと述べている。無罪の人たちの命令でどれだけたくさん命を奪い、日本国憲法のおかげでどれだけ命が助かっているか比較の余地もない。私は靖国神社に初めて行つたが、行くまでは何がどう表現され、展示され、述べられるのか知らなかった。こんなにも許しがたい内容だとは想像しなかった。それがわかっただけでも意義ある学習であつたが、私たちの考えも間違っていないと思つた。

(1科 江藤 ちひろ)

編集後記

地球温暖化を肌で感じた今年の夏でした。この「なのはな通信」がお手元に届く頃には秋風がたつていることを願っています。編集委員会は「なのはな通信」の意義について検討し、この号から広く関係者のお手元に届けられるようにしました。御父母の皆様、東京勤医会、東京民医連の職員の皆様、ご一読下さい。学生たちの様子がリアルに伝わるよう紙面の改善に努力しています。皆様の感想、ご意見をお寄せいただければ幸いです。

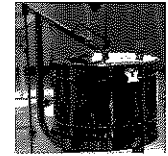
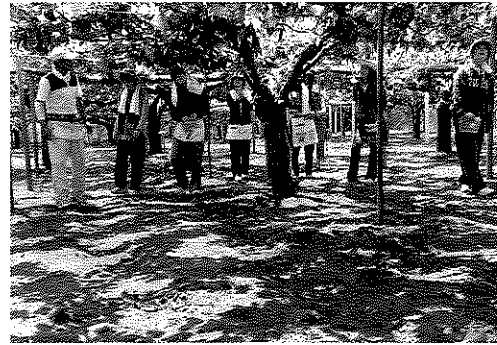
なのはな通信編集委員会



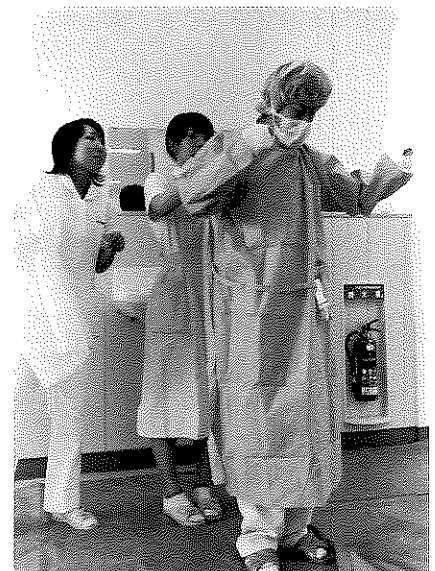
生活労働フィールド



キラリ 学ぶ青春



小林功
モノクロ写真館



基礎看護技術



合宿研修

